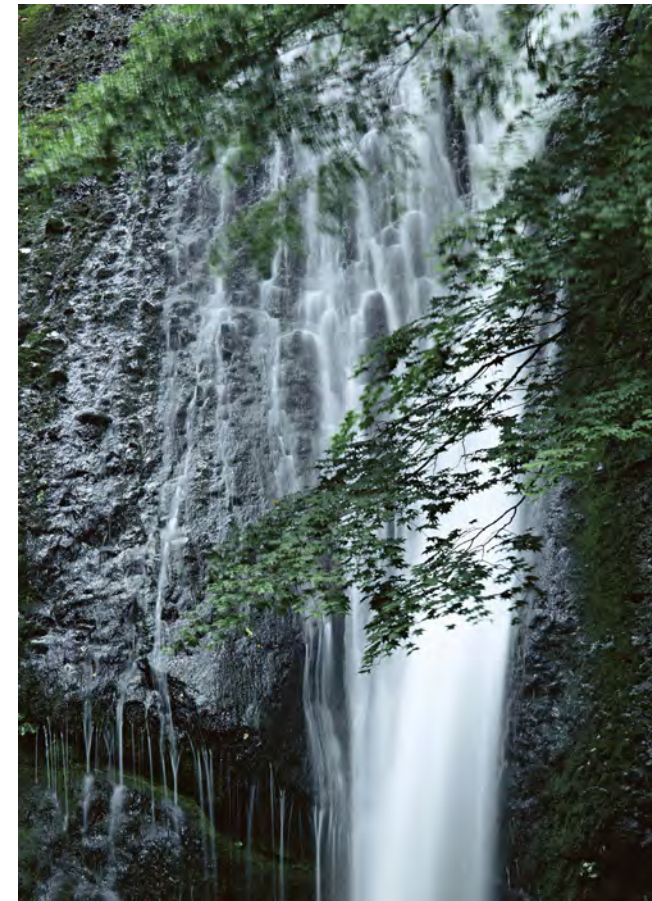


MORRIS 40th ANNIVERSARY

VARIVAS[®]

NATIVE TROUT CONCEPT BOOK
ANGLER'S VOICE

Gijie
Production Work



株式会社モーリス
〒358-0033 埼玉県入間市狭山台4-17-11
TEL.04-2935-0701 FAX.04-2935-0731
<https://www.varivas.co.jp>



皆川 哲 西村 雅裕 岡部 功一 本山 博之



MORRIS LEGEND ANGLER INTERVIEW

～ VARIVASと共に歩んできた道～

溪流、本流、湖……、トラウトルアーの草創期からこの世界を切り開き、常に牽引してきたレジェンド・アングラー。彼らはどんな風にVARIVASラインと出会い、数々の実績を残してきたのか……。ここではそんな釣り師と糸のクロスオーバーストーリーをお届けしよう。

モーリス創立40周年の歩み

1980年

ラインブランドVARIVAS設立
VARIVAS® (初の国産I.G.F.A.規格のライン)

1983年

VARIVAS GX
VARIVAS プロタイプ

1986年

VARIVAS スーパーソフト

1991年

フックブランド・グラン 設立

1993年

VARIVAS スーパートラウト

1995年

バス釣り用フック&シンカーなどのブランド・ノカレス設立
VARIVAS初のPEラインVARIVAS 10×10 (船釣り用)

1996年

VARIVASビデオ、ザ・ミニーイング(皆川哲、本波幸一／溪流)

1997年

VARIVAS初のルアー、ヒコス&カブリィ
VARIVASビデオ、ザ・ミニーイングII(皆川哲、本波幸一／瀬上魚)

1998年

VARIVAS ゲーム

1999年

VARIVAS スーパートラウトアドバンス
VARIVAS スーパートラウトノルデック
VARIVAS トラウトショックリーダー・ナイロン
VARIVAS トラウトショックリーダー・フロロ
VARIVASビデオ、ザ・ミニーイングIII(皆川哲、本波幸一／北海道)
VARIVASビデオ、スーパーアクショントラウトフィッシング

2000年

グラントラウトシングル(スプーン用シングルフック)
超耐摩耗糸VEP製法

2001年

RSTのフライロッド販売を開始

2002年

VARIVAS スーパートラウトアドバンスVEP
VARIVAS エクストラプロテクトVEP

2005年

グラントラウトシングルブラッキングモデル



2006年

VARIVAS スーパートラウトアドバンス・ビクトトラウト

2008年

VARIVAS スーパートラウトアドバンス・マックスパワー PE
VARIVAS スーパートラウトアドバンス・サイトエディション
VARIVAS トラウトショックリーダー 「フロロカーボン」
トラウトルアーロッド・アルベロシリーズ
グラントラウトシングル・プロスベックスーパーファイン

2009年

VARIVAS スーパートラウトアドバンス・ダブルクロスPE

2010年

VARIVAS スーパートラウトアドバンス・ブラック・サクラマス

2011年

VARIVAS スーパートラウトアドバンス・トイッチマスター VLS [ナイロン]

2013年

VARIVAS スーパートラウトアドバンス・マックスパワー PEをリニューアル

2014年

VARIVAS スーパートラウトアドバンス・ベイトフィネス[ナイロン]
VARIVAS スーパートラウトアドバンス・ベイトフィネス[プレミアムPE]
自社ロッドの開発プロジェクト・グラファイトワークス始動

2015年

VARIVAS ストリームショックリーダー [ナイロン]

2016年

VARIVAS スーパートラウトアドバンス(リニューアル)
VARIVAS スーパートラウトアドバンス[サイトエディション] (リニューアル)
VARIVAS スーパートラウトアドバンス[トイッチマスター] (リニューアル)
VARIVAS スーパートラウトアドバンス[ダブルクロスPE] (リニューアル)
VARIVAS スーパートラウトアドバンス[マックスパワー PE] (リニューアル)
VARIVAS スーパートラウトアドバンス[ビクトトラウト] (リニューアル)
VARIVAS スーパートラウトアドバンス・ビクトトラウトショックリーダー 「フロロカーボン」

2017年

VARIVAS スーパートラウトアドバンス[VEPブッシュトレイル]
VARIVAS スーパートラウトアドバンス[マックスパワー PE-S-スベック]

2019年

VARIVAS スーパートラウトアドバンス[マックスパワー PE] X 8
VARIVAS トラウトショックリーダー Ti フロロカーボン

2020年(創立40周年)

VARIVAS スーパートラウトアドバンス エクストリームショックリーダー



[この年表に記載されているのは、カタログへ初めて掲載された年で、実際の発売年とは異なる場合があります]



「それまで使っていたラインは、硬くて伸びの少ないものが多かったんです。それと、釣り人も未熟で、リールを使いこなせていないくて、ドラグを調整して魚とのやりとりで最適なドラグ設定を行うことも無かったと思います。それでラインが伸びるとドラグの代わりになる。シーバスとかデカイ魚の釣りに伸びるラインは向いていると思ったんです」

『スーパースoft』というラインを使うようになって、伸びるラインの使いやすさは実感できたのだろ

うか。

「マスターとして正式に契約したわけではなんでしょうが、その後、ラインを追加でいただいたり、担当者の方と色々やり取りする中で、自分が好むラインとして《伸びのあるライン》を使いたいていうのを伝えた記憶はあります」

しかしそれは、試作品を使ってみて、担当者と意見を交換しながらラインの性能を詰めていくような、いわゆるマスターとして開発に関わったということではなかったという。

「僕は提案をしただけ。その後、スーパーソフトが商品化された時にラインをいただいたわけですが、柔らかくて伸びのあるラインになっていました。自分の意見が少しでも取り入れられたならうれいすけど……」

皆川さんの提案がどれだけ反映されたかは不明だ。しかし、結果として欲しかったラインを皆川さんが使えるような状況になったという事実は動かない。

モリスと出会う前、皆川さんが使っていたラインは海外の商品だった。「覚えてるのは『ストレーン（デポボン）』ですね。値段が安かったから。他にはあまり使った記憶もないな。当時は、ラインが消耗品という感覚は今より少なくて、頻繁に巻き替えたりもしませんでした。シーバスなら、3号ぐらいのラインを巻いてしばらく使っていましたね」

「ストレーン」やモーリスのラインを使つた後で、担当者に伝えた《伸びるライン》という発想はどこから来たのだろう。

「それまで使っていたラインは、硬くて伸びの少ないものが多かったんです。それと、釣り人も未熟で、リールを使いこなせていなくて、ドラグを調整して

魚とのやりとりで最適なドラグ設定を行うことも無かったと思います。それでラインが伸びるとド

ラグの代わりになる。シーバスとかデカイ魚の釣りに伸びるラインは向いていると思うんです」

「スーパースフト」というラインを使うようになって、伸びるラインの使いやすさは実感できたのだから。

「溪流のダウンクロスの釣りで、自分の立ち位置より下流側に流し込んで、ロッドアクションでミノノーに動きを与える釣りがありますが、ラインが伸びることで、ガンガン瀬でも流れに馴染むのがいいところだと思います。伸びの無い、たとえば今のPEラインだとレスポンスが良すぎて流れから飛び出たりするんですが、ラインが伸びて流れの中であつとこらえてくれることで魚が釣れるんです」

福島出身の皆川さんは、東北の溪流に頻繁に通っていたというが、1980年代の溪流のルアーフィッシングとはどういうものだったのだろう。

「その頃の漢流は餌釣りがほとんどで、ルアーをやる人でもスプーンとスピナーだけで、ミノーはかなり珍しかったですね。僕はモリスさんと出会う前から「チップミノー」をハンドメイドしていて、『スーパーストフト』が出る頃にはスカジットデザインズを立ち上げていました」

20ポンドで宮古島の
GTに挑む

『スーパースフト』は、トラウトでも海でも、ルアーフィッシング用ラインとして少しずつ浸透していった。

「声高に、このラインがいいよって宣伝したわけじゃないんですが、僕が『スーパースフト』を使っているのを見て、僕の周囲の釣り人は使うように

になりましたね。ただ、地方に行くと、個人営業の釣具店ではもちろん、チェーンの量販店でもまだ扱っていないかっただと思います」

1990年代には、ルアー用ラインの代名詞のような存在になる『スーパースフト』だが、1980年には手に入る釣り具店すら少なかった。ルアーフィッシングは、マイナーな釣り方



TOURNAMENT LINE

PREMIUM QUALITY

VARIVAS[®]

super soft

IGFA CLASS

COPOLYMER MONOFILAMENT FISHING LINE

EXTRA SOFT COATING NYLON

MORRIS CO., LTD.

MORRIS LEGEND ANGLER INTERVIEW

日本のルアーフィッシングシーンが、発見と拡大と進化と細分化を深めていた1980年代半ば。皆川さんが何気なく発したひと言が、時代を捉えた名作、スーパーソフトという釣りの誕生につながった可能性はゼロではない。

『Super Soft』が生まれた頃

だったのだ。

「1990年に宮古島でGT（ジャイアントトレバリー）の釣りの開拓を始めたんですが、今考えると、なんて弱いラインで釣りしていたんだろうって思いますね。当時のラインシステムは、メインラインが「スーパーソフト」の20ポンドで、ビミニリストとオルブライトノットで、60ポンドのリダーを結ぶわけです。もちろんもっと太いラインもあるんですが、ベントの「50SS」のスプールだと、20ポンドを目いっぱい巻いて300m入るかどうかってところでいうから、ラインキャバを考えるとこれ以上太くできなかつたんです」

現在のPEラインで20ポンドという、1・2号程度だろうか。現在にも過去にも、GTを1・2号のPEで狙う人は皆無だろう。

「もちろんデカイ魚にはブチブチ切られましたよ。10kgでも向こうむいて走られたら止められません。それでも30kgオーバーを何本も捕りましたし、最大で50kgオーバーもキャッチしました。魚と力比べはできないので、掛けたら釣りをする側が我慢をして、ラインの伸びがドラグの代わりをしてくれて、魚が疲れるまでラインが切れなかつた場合にやっとキャッチできるって具合ですね」

今はやはりPEラインを使うことが多いという皆川さんだが、ラインとロッドには相性があるという。

「伸びのあるラインの場合はロッドは硬めの方がいいし、PEなら軟らかめのロッドがマッチすると思います。僕が25年前に作った「サスペンド」というロッドは、ユーザーに硬いといわれましたが、柔らかなラインを使っていたので、やはりあれでよかったと思うんです。ナイロンとPEでは長所短所があって、ダウンでナチュラルなロッド

「このP/Eはシステムを組む場合に僕が使うナイロントリーダーとの相性がいいですね」

35年の歴史の中で、モリスに対して不満はなかったらうか。

「スーパースフトから今のP/Eまで、約35年間モリスのラインしか使ってないの、他社との比較はできませんけど、満足してますよ……強いいうなら、今のラインの商品名が長すぎます！ パリバス・スーパートラウトアドバンス・マックスパワーP/Eとかジジイには憶えられません(笑)」

まとめ◎丹律章



皆川さんが現在使用しているライン。ナイロンリーダーとの相性の良さが気に入っている。



皆川さんと言えばこの「チップミノ」。国産初の溪流ミノであり「ミノイグ」という言葉を生み出した。

きつかけは 海のビッグゲーム

「今こそトラウトのイメージが強いかもしれないけど、モリスさんと付き合い始めた頃は、海のビッグゲームが釣りの中心でね、たとえば海外のトレバリーとか、国内ではシイラ、カツオといったところかな。その頃、主にルアー＆フライのメーカーを扱っている三ツ柿という広告代理店があって、オフショアのイベントなんかも企画していた。その担当者に『スーパーソフトを使ってみませんか?』と誘われたのがきつかけだね」

時は1980年代の後半、西村さんが前職の服飾デザイナーを辞め、UFMウエダに入社して間もない頃の話だ。当時、西村さんは米国製の「アンデイ」というラインを使用していた。国産で好みに合うものがなかったというのだが、強度はあっても硬く、キャストの時にバラけたり、トラブルも多かった。その点『スーパーソフト』はその名の通り柔らかくしなやかで、すぐに愛用するようになった。『それと、当時は『ドルフィンステイック』という竿を使っていたんだけど、これに金色のペンのリール、ブルーの『スーパーソフト』がとても似合ってたんだよね。しばらくはオフショアだけじゃなく、シーバスやサクラマス、溪流にバスとあらゆる釣りに『スーパーソフト』を使っていたね」



2001年の米代川。ライトタックルによるシャロー・ミノーイングを模索していた頃。PEも試したが実用的ではなかった。



VARIVAS COVER BREAKER
ブラックバスでヘビーカバーなどを狙うために開発されたナイロンライン。この感度の良さが、西村さんのライトタックルゲームには必要だった。



「カバレイカー」を使用した頃、雪代で釣りをしていた頃。写真は2000年代前半の丸頭電川のサクラマス解禁釣行。

しなやかな PEの出現で シャロー ミノーイングが完成

そんな西村さんが、先ほどの『マックスパワーPE』がリリースされたのと同時に、満を持してPEへと移行した。2008年のことだ。

「正確には発売前からプロトモデルを使用してはいたんだけど、PEなのにしなやかなことにまず驚いたね。トラウトでは珍しく8本編みで、ラインの表面に特殊な加工をすることでそれを実現したようだけど、僕のようにトウイチチを多用するスタイルでもトラブルが少ないんだ。細い糸が使えるから飛距離も出るし、感度は元からの折り紙つき。本当に、ある意味では、



VARIVAS SUPER TROUT ADVANCE
MAX POWER PE X8

西村さんが現在愛用しているPEライン。雪代で濁りの入った本流で釣りをすることが多いため、視認性の良さをセレクト。

ミノーイングに最適なラインを求めて シャローに最適なラインを求めて

シャローに最適なラインを求めて、ライン選びは常に最も大切な要素だった。時にはジャンルを超えて選ぶことも……。変遷の歴史を紐解く。

MORRIS LEGEND ANGLER INTERVIEW

VOL. 2



サクラマスのトップアングラーとして、また数々の名竿を輩出してきたロッドデザイナーとして、トラウトルアーを牽引してきたカリスマ的存在。M&Nローボレーション代表。

Masahiro Nishimura

ミノーイングに ベストな感度 バス用ナイロン ラインを愛用

その後、本誌に残っている記録では、20007年頃から西村さんはPEラインをトラウトにも導入する。だが『スーパーソフト』の使用をやめ、『スーパートラウトアドバンス』『マックスパワーPE』（以下マックスパワーPE）に移行するまでの間、メインに使っていたのは意外にも『カバレイカー』というバス用のナイロンラインだった。

「バスでヘビーカバーなんかを狙う時に使うラインだから根ズレに強かったのはもちろんだけど、カモフラージュカラーだったんで、魚に見破られにくいという面もあった。そして何よりも、このラインはナイロンでありながらも感度が良かったんだ。この当時は、ちょうどサクラマスのライトタックルゲームを確立しようしていた時期だから、トラウト用じゃなくてもこの感度が必要だったんだ」

西村さんのサクラマス・ゲームの代名詞といえば、いわずと知れた『シャロー・ミノーイング』である。トウイチチでミノーを自在に操り、魚を誘っ



モリスとの出会いは海のビッグゲーム。『スーパーソフト』はロッドとの相性も良かった。

「やっぱり視認性を重視してのことだね。サクラマスの場合、雪代で濁っている場所で釣りをする機会が多いから見やすいのが一番なんだ。ラインに色が付いていることで釣果に影響が出たことは、サクラマスに限りはないと思うよ。それと歳とったんで、カモフラージュカラーだとよく見えないんだよ（笑）」

最後に、バリバスラインが今のルアーフィッシングの世界に与えた影響について聞いてみた。

「おそらく、僕の記憶が確かならばIGFAクラスとか、ラインに明確な規格を導入したのがバリバスだったと思うよ。ポンド表示が主流になったのもその後だし……。いわゆるゲームフィッシングという概念を定着させたのがバリバスだったんじゃないかな」

まとめ◎山中光博

2016年の米代川。PEラインの進化でライトタックルによるシャロー・ミノーイングは完成した。



近年はサクラマスとイトウを追いかけている。昨年は20年ぶりに天塩川へ。この写真は2001年の猿払川。



SUPER TROUT ADVANCE
MAX POWER PE S-SPEC

「マックスパワーPE」をしなやかさを損なわず、ライン表面に「スモースシールド加工」を施し、飛距離と耐水性をアップさせた画期的なPEライン。カムフラージュ性の高いジャンパンゴルドカラーに幅1mのホワイトマーキングで視認性をアップさせている。



SUPER TROUT ADVANCE
EXTREME SHOCK LEADER

しなやかさと強度を極限まで追求したナイロン製のショックリーダー。フロロカーボンのリーダーでは対応しにくい厳冬の釣りなどに。適度な伸びがバランを軽減する。

近年釣り上げた湖の大イワナ。思えばルアー＆フライの草創期も、こうした人造湖からすべてが始まった。



MORRIS
LEGEND ANGLER
INTERVIEW

VOL.3 *Kaichi Okabe*

岡部功一

ルアー＆フライフィッシングの草創期、いち早くこの世界に目覚めた釣り師たちは、ジャンルを問わずこの新しい釣りに心酔した。岡部さんもそんなパイオニアの一人で、湖、海、本流と開拓の陰には、いつもVARIVASのラインがあった。

ルアー＆フライの草創期から精力的な活動を続け、湖や本流の大物ではパイオニア的存在の一人。カメラマンとしても著名で、バーモスの飯田重祐氏とタッグを組んだ多くの著書がある。東京都八王子市在住。

湖、海、本流…… VARIVASと共に歩んだ大物たち

「最初に使ったのは、ブランド名そのまの『VARIVAS』というライン（モリス社がVARIVASブランドから磯、サーフから磯、沖へと、シーバスだけではなく青物、根魚と海のルアーへと引き込まれていく中で、店主の原田さんから紹介されたのがモリスのラインだったそう。」

VARIVASラインの思い出
九頭竜川と銀山湖
その後「スーパーソフト」が発売になると、岡部さんはすぐにその使い勝手の良さに驚かされたという。トラウト、ソルトのいずれでもこの新たなラインを愛用するようになる。「これは誰もが言っていることだと思いますが、とにかくしなやかでトラブルが少なかったですね。僕の場合には解禁直後の湖とか寒い時期の釣りも多いじゃないですか。そんなガイドも凍るような条件下でも「スーパーソフト」の《柔らかさ》は秀逸でした。その当時「スーパーソフト」で釣り上げた魚で印象に残っているのが、生涯初の九頭竜川のサクラマス。「スーパーソフト」の8ポンドでキャッチしたものでした。

VARIVASラインの思い出
九頭竜川と銀山湖
その後「スーパーソフト」が発売になると、岡部さんはすぐにその使い勝手の良さに驚かされたという。トラウト、ソルトのいずれでもこの新たなラインを愛用するようになる。「これは誰もが言っていることだと思いますが、とにかくしなやかでトラブルが少なかったですね。僕の場合には解禁直後の湖とか寒い時期の釣りも多いじゃないですか。そんなガイドも凍るような条件下でも「スーパーソフト」の《柔らかさ》は秀逸でした。その当時「スーパーソフト」で釣り上げた魚で印象に残っているのが、生涯初の九頭竜川のサクラマス。「スーパーソフト」の8ポンドでキャッチしたものでした。

シーバスを始めて2年目、湘南の花水川でキャッチした92cm。ここからVARIVASとの長い付き合いが始まった。



MORRIS LEGEND ANGLER INTERVIEW 06



写真上：銀山湖の湖沼型サクラマスとしては大型の67.7cm、3.55kg。「アドバンス」の8lbと24gのスプーンで。写真下：初めて手にこした九頭竜川のサクラマス。13cmの軽量ミノーを使うために「スーパーソフト」の8lbを使用した。



「去年は新型コロナの影響で思うよう
が、明確に分離している場所があり、その境目で24gのスプーンを沈めて釣りました。岸から100m以上離れた沖合でした」

本山博之



写真提供＝ルアーマガジンリバー

本山博之という人物 溪流ベイトフィネスの 確立

まずは、僕のような若輩者に、このような原稿を任せて頂けることに、心から感謝すると共にかなり緊張している。

僕が釣り業界に入ったきっかけは「完全に本山さん」だと断言できる。師弟と言うにはあまりにも上下の境がなく、先輩、後輩というよりは違かに近い距離で、本山さんの「マルチプロアングラー」としての仕事っぷりを見られるポジションに恵まれたことは、僕のキャリアの中でもとても特別なことだ。

「霞の帝王」と呼ばれた本山さんが、連勝を含む、バサールスタークラシック」の3勝を輩頭に、バスターナメントの世界で圧倒的な実績を残したことはここで改めて語るまでもないかと思う。その後トーナメントの世界から会津の松原湖へ舞台を移し、ガイド業を営みながら多方面の釣りで活躍。とくにワカサギや溪流ルアーフィッシングにおいては、その存在感は非常に大きかったと思う。

僕との出会いは、福島で行われた溪流ルアーフィッシングスクール。僕は生徒として参加して、そのまま福島に延泊した。そして人生初の尺ヤマメを、翌日同じフィールドで釣り上げることができた。「人に釣りを教えること」は本山さんの真骨頂だったように、何だか分からないようでありながらも「ストン！」と落ちてくる不思議な魅力があった。「本山節」とでも言おうか、本山さんのスクールはとても人気があったのを覚えている。

そんな本山さんだが、近年の代名詞と言えはやはり《溪流ベイトフィネス》の確立だ。フジテレビの番組「ほ

MORRIS LEGEND ANGLER INTERVIEW

VOL.4

溪流ルアーにも ベイトフィネスを！

昨今のトラウトルアーで最も変わったのは、『溪流ベイトフィネス』の台頭だろう。その火付け役が故本山博之さんである。ここでは公私にわたって交流があり、共にベイトフィネス専用ラインの開発にたずさわった山本健司（やまけん）さんが当時を振り返る。

写真と文◎山本健司（やまけん）
TRY-ANGLE / 五十鈴工業 代表。本山博之氏と共に溪流ベイトフィネスを普及させた第一人者。
「釣れる魚はなんでも釣る。釣れない魚はなんとかして釣る」をモットーに各地の溪を駆け巡っている。

こゝまで」をきっかけに溪流でのベイトタックルの有効性に目覚め、いち早くそれを投入していた僕に毎日のように質問の電話がかかって来た日々が、昨日のことのように思い出される。「なぜリールをチューニングするのか」というベールシクな部分から、ベアリングの材質選びやスプールの軽量化、そして弊社で販売していたベイトロッドのエントリーモデルに関する開発要件や、次に必要と思われる要素出しにいたるまで、本当にあらゆることを毎日電話で話していた。

本山さんは非常にフェアな方で、溪流ベイトに関する取材依頼が舞い込む度に「この話はやまけんちゃんから聞いたから、彼も呼んでよ」といつも僕を前面に立ててくれた。釣り業界でのポジションを考えれば、実績・存在ともに遥かに大きな本山さんだけ

に、溪流ベイトフィネスの世界を独り占めにすることも楽々としてきたはず。そうしなかったのは、本山さんが「自分の利益」ではなく「新しい釣り」「楽しい釣り」を伝えること、そして「釣り」という遊びが広がっていくことに重きをおいていた証拠だと僕は確信している。

取材やテスト釣行を共にする機会を多く与えてもらい、何日も何日もフィールドで一緒に過ごしたが、本山さんがこの「大好きな釣りをもっともっと広げたい」という姿勢からブレることとはなかった。

溪流ベイトフィネス 専用ラインの開発

本山さんは、バスフィッシング時代はもちろん、ワカサギの仕掛けでもキ

ーパーソンとしてモリス社と深く関わっていた。そんな彼が、溪流ベイトフィネス専用ラインの開発を言い出すのは、必然というか当然の流れだった。僕のところにも本山さんから、要件出しやテスト、そしてフィードバックのまとめやアイデア出しなど、次々と依頼が飛んで来た。

本山さんの場合、製品開発に携わる場合には、かなり深い部分まで入り込んで物を作っていく、テスターというよりはむしろフィールドデベロッパーとも言えるような取り組み方だった。「ベイトフィネスPE」の開発に関しても然り。当時、PEラインのコーティングトレンドは、コシの強い（張りのある）モノフィラのような方向性を目指すものがほとんどだった。だが、軽量ルアーをキャストするベイトフィネスの場合、スプールに馴染

むようなしなやかなラインの方がバックラッシュし難いという特性がある。張りのあるラインはスプール上で「真っ直ぐになろう」とするので、浮き上がりやすく、絡みの原因となるからだ。とはいえ、しなやかすぎても、今度はガイドやレベルワインドへの絡みが出て来る。このあたりのバランスを、本山さんはトレンドを一旦離れつつも、何度も製品を試すことで見出していくという流れで調整していた。

僕は、そんな本山さんの仕事を手伝うことで、本山流ハウトゥをたくさん吸収させてもらった。常に2年後、3年後を見据えていて、何ならその先もなんとなくは見ている。ともすれば翌シーズンや今シーズン売れるもので頭がいっぱいになってしまいがちなところを「釣りは続いていくんだから、焦らないでやるぞ」という本山さん。普段のせっかちな性格とは真逆の、慎重で精緻な開発姿勢が印象的だった。

本山さんが遺したものの 新たなラインの開発へ

亡くなる数日前まで、僕は本山さんとフィールドに出ていた。開拓に力を入れていた十和田湖のヒメマス釣りを。陸っぱりからだとうしても探り切れない広大な十和田湖を、バスボートとアルミボート2艇体制で駆け巡り、もっと釣れるように、もっと楽しめるように、様々な角度から検証している最中だった。

釣り方はもちろん、常に新しいフィールド、新しいターゲットと楽しい釣りを模索し続けた本山さんの姿勢は、釣り業界の人間になった僕の中にクッキリと刻まれている。

さて、本山さんを手伝う形で開発に



本山さんの愛艇に同乗し、沖から十和田湖の開拓をしている時の記念写真。彼の思いは今もしっかりと生きている。



SUPER TROUT ADVANCE BAIT FINNESS PE

超高感度、低伸度を誇るベイトフィネス専用のPEライン。スーパーフッ素加工で優れた耐久性と滑りやすさを実現。本山さんと共同で開発したこのラインは残念ながら今春で廃盤。現在新しい専用ラインの開発が始まった。

参加させてもらった「ベイトフィネス」シリーズは今春から廃盤となり、現在さらに新しい手法が用いられたベイト用PEラインの開発が始まっている。まだまだ若輩の僕だが、本山さんの姿勢と情熱を少しでも継承できるように、これからも可能な限りお手伝いさせて頂ければと思っている。本山さんは、その釣りに、その姿勢に触れた人々の中でも今もしっかりと生きている。僕はそう確信しているし、これからも「楽しい釣り」を発信し続ける所存だ。



溪流ベイトフィネス（写真上）と十和田湖のヒメマス釣り（写真下）、そして山と源流が本山さんの近年の代名詞的な釣りだ。



2008



2008



2007



2006 サクラマスをはじめとして本流の大型がクロスアップされた時代。広告に使われる魚種はやはりサクラマスが一番多い。



1993 同じ「Angling」に掲載された広告。中央に配置されたビミニニストに時代を感じる。徳島の露口義司さんのノットを撮影した。



1992 「Angling」に掲載された「スーパーソフト」の広告。愛用者100人のうち53人が強さを、47人がしなやかさを支持した。ヘンのリールが懐かしい。

VARIVAS 40th ADVERTISING

～広告でみる40年の歩み～



2020 厳冬期でもトラブルの少ないナイロン性のショックリーダー。背景のサクラマスの銀鱗が象徴的だ。



2015



2014



2013



2018



2017



2016



1999



1997



1993



1993



2006



2005



2002



2000

MASASHI
KAWASHIMA

北陸地方を中心に活躍し、九頭竜川の草創期を知るベテラン。名品「シュガーディーブ」の産みの親。バスデイルアーデザイナー。

テスター特別対談
桜鱒とVARIVAS
【PEライン編】

川島雅史 佐藤雄一

圧倒的な感度の良さと、細糸を使えるのでルアーの飛距離が出るというのがPEラインの物理的な長所だ。サクラマスの釣りにPEを使用し、「ナイロンに戻るわけがない」という2人による、ラインとサクラマス釣りのお話。

YUICHI SATO

北上川水系のバイオニア的存在で、近年は最上川や米代川へも遠征。ロッドやルアーの開発にも携わる。宮城県石巻市在住。

海釣りからPEへ

——モリスさんとの関係と、これまでサクラマスの釣りで使ってきたラインについて教えてください。

川島「海も淡水も、最初は海外のラインを使っていたんですが、1985年にモリスから『スーパーソフト』というラインが出たんですね。使ってみるとこれが滑りが良くて革新的に使いやすいんです。そう思っていたところで、知り合いを通じてモリスさんを紹介してもらってラインの提供を受けるようになったんです。だから、サポートしてもらった前から『スーパーソフト』を使っていたということになります。その後は『スーパーソフトラウト』っていう茶色いライン、『スーパーソフトラウト・サイトエディション』っていう黄緑色のラインを使っ



写真左：佐藤雄一さんは、旧北上川河口付近のシーバス釣りが縁でモリスとの付き合いが始まった。写真右：サクラマスの草創期、1992年の九頭竜川で初めて釣り上げた時も、川島さんは「スーパーソフト」を受用していた。

た時期があつて、それからPEです。私は海もやりやすから『10×10船』、そのルアー用バージョンの『10×10船ジギング』、そして『アバニ』とソルト用のPEラインをサクラマスにも流用しました。その後でトラウト用の『マックスパワーPE（スーパーソフトラウト・アドバンス・マックスパワーPE X8）』を使い始めて、今もこれを使っています。ラインの太さは、スビニングなら1号か1.2号ですが、ベイトタックルの場合は1.5号です。バックラッシュしても太いとリカバリーしやすいんです。それと、サクラマスは8本編みを使いますが、溪流では4本編みです。溪流は周囲のボサとかにメインラインがコンタクトする確率が高いので、単繊維が太いほうが耐久性が高いんです。

——佐藤さんはモリスさんとはどうやって付き合いが始まったんですか。

佐藤「1993年から1994年頃に釣り雑誌の編集部に紹介いただいてモリスさんからライン提供を受けるようになったんです。当時北上川の河口でバイブレーションを使ったシーバス釣りが盛んで、凄く釣れていたんですが、その釣りでまさに『スーパーソフト』を使っていたね。『スーパーソフト』の後は、ちょっと硬かったので苦労しましたけど、『ゲーム』を使ったり、次に『スーパーソフトラウト・アドバンス』ですね。その後で、初期のソルト用PEの『アバニ』を使い始めました。厳寒期はナイロンラインを使うとか、時期や条件によって使い分ける時代もありましたね。その後が『トレーサー（アバニ・シーバスPE・マックスパワー・トレーサー）』を使って、今は『Sスペック（スーパーソフトラウト・アドバンス・マックスパワーPE・Sスペック）』です。

遠距離でのアドバンテージ

——ここで改めて、PEラインの長所と短所について教えてください。

川島「例えば、九頭竜川でいえば中角から高屋橋にかけての川幅の広いエリアで、ロングキャストした先の遠くで魚がヒットした場合ですけど、ナイロンなら、追いアワセを何度もしてフックを魚の口に貫通させるのですが、PEならほとんど伸びないので強いアワセは必要なくて、ドンときたらもう乗っていることが多いです。広い川はPEじゃないとね……」

佐藤「北上川でもナイロンを使う人はいらんですけど、ロングキャストが中心なのでアタリが取りにくいのではと思うこともあるんですが」

川島「確かに、70m、80m先で魚がアクションを起こしても、ナイロンの場合には伝わりにくいと思いますね。近距離ならいいけど……。とくに前アタリに関しては、ナイロンの頃の数倍は情報が多いように感じます。それと、遠征先で釣りに疲れて宿に戻ってから、ラインを巻き替える作業がね……遠征だと、何日も連日釣りするから、あれが大変。PEなら何もしなくていい。海だとしてもスプールに水掛けて終わりですから。ナイロンとPEとのメンテナンスの差は大きいんですよ」

——根ズレには圧倒的に弱いと思いますが。

川島「それは確かにPEの弱点ですね。手前に消波ブロックがあるような場所では、取り込みの時にラインを切られる可能性が高くなりますね。それを補うために、一時期リーダーを長くしたり太くしたりという実験をしたんです。フロロ20ポンドを5mとるとか。そうしたら、50後半までは何とか耐えられ、65とかそれ以上にな

写真左：ジギングなど海のルアー用に発売された製品を経て、ナイロンからPEへと転換した川島さん。PEラインの魅力は、遠距離でのアドバンテージとメンテナンスの簡単さだという。写真右下：川幅が広く、常にロングキャストが必要とされる北上川水系では、より遠くまで運べるPEラインの使用は不可欠だと佐藤雄一さんは力説する。



ると、場所によっては何をしてもダメなことが分かりましたね（笑）。ゴリ巻きして何とか魚を浮かそうとか、いろいろやってみたんですけど（笑）」

佐藤「確かに根ズレに弱いというのは事実でしょう。だけど、それを差し引いてもPEの方がいいと私は思っています。感度がいいので圧倒的に情報伝達能力が高い。イメージですけど、魚が追尾した感触も分かる気がする。北上川は流れが緩いので、沖で暴れさせて疲れさせて、手前の根ズレしやすい箇所ではやや強引に寄せる方法で、私はラインブレイクを防いでいます。PEの太さは0.8号メインで、時には0.6号まで落としますけど、切られずに獲れていますから」

川島「私の初めての70cmオーバーは庄川のサクラマスなんですけど、これもPEで飛距離を出して釣った魚です。ボトムトゥイッチャーで底をトントんとしゃくった先でドンとヒットしたやつですから、PEじゃないと釣れてないかもしれない」

佐藤「私は、ここ10年くらい、沖の魚を獲るためにメタルジグを使うんです。最初は20gくらいから始めたんです

が、今年40gまで入れてみたら、その先の魚が掛けられるようになった。これはPEならではのですね。ナイロンだとフルキャストできないんじゃないかな。距離も出ないでしょうし、感度が悪いと自分が何をやっているか分からない。釣ったというより釣れちゃったってなる。ただこの釣りも、どこまでジグを重くしていくかっていうのは大きなテーマで、ショアジギロッドで60g、80gを投げるのはやり過ぎだと思うので……」



KOICHI
HONNAMI

米代川、赤川、地元の岩手沿岸河川など、東北のサクラマスを中心に行動する大物釣り士。HONNAMI SPIRIT代表。

ナイロンラインにこだわる理由

新素材としてのPEラインは、ソルトルアーの釣り人に受け入れられたのちに、トラウトの世界にも浸透し始めた。圧倒的な性能を理由に本流はもちろん山岳渓流までPEを使う釣り人が増える一方、サクラマスの釣りでもナイロンラインを使い続けるアングラーもいる。やはり「ナイロンが最強だ」という2人による、ラインとサクラマス釣りの話。



テスター特別対談
桜鱒とVARIVAS
【ナイロンライン編】

本波幸一 佐藤偉知郎

ICHIRO
SATO

米代川水系のサクラマスを中心に、独自の理論と行動力で幅広く活動するトップアングラー。ソウルズ代表。

リーダーを使い分ける

川島「PEといえませんが、私が一番最初にPEラインを使ったのって、1992年に発売したサクラマスのDVDの取材の頃なんです。知り合いが『新素材のラインをもらったから使ってみてよ』って他社さんのPEラインをくれたので、せっかくだからスプールに巻いて使ってみたんです。そしたら途端にアタリが無くなった。何でだろうって考えたんですが、あの頃は竿が10フィートのシーバスロッドで、ガイドがS i Cじゃないんです。それで、ラインとガイドのすれる抵抗音が凄かったんです。その音をわざわざ糸電話で水中に届けているような気がして、使うのはすぐにやめました（笑）」

——PEラインにはリーダーが不可欠ですが、結節はどういうノットでしょうか。

川島「最初は電車結びだったけど、今はオリジナルのFGノットです。編み付けの部分を長くするんですが、最初に5回くらい編んでハーフヒッチを入れていったん締めこむんです。それを3回繰り返すと編み付けの先っぽが安定するので、その後長く編み付けても緩まないんです」

佐藤「私は一番古いフィッシャーマンズノットです。簡単に強度が出るノット。真つ暗闇の中でも結べるし、マグロとかやるなら別かもしれないけれど、私がやっている釣りでは今のところ問題ないです。リーダーの長さは1mくらいで短め。私は、どの釣りでもそれくらいなんです。今シーズンは、モリスから新しく発売されたナイロンリーダー（スーパートラウトアドバンス・エクストリームショックリーダー）を使って厳寒期に1本獲ったんだけど、ナイロンのしなやかさ



近年はメタルジグを導入して実績を積み上げている佐藤さん。これも飛距離の出るPEラインならではの。



川島さんのレコードフィッシュである庄川の70.5cm、4.6kg。ロングキャストで手にした一尾。

が有利に働いたのかなと思います。イメージですけど、フロロだったら硬いのでフォールで巻き癖みたいなものがルアーの動きを左右したかもしれないなって思いました。厳寒期はナイロンリーダーで、水温が上がってからはフロロを使うことが多いですね。それと、ややこしいところを通すにもフロロです」

川島「私の場合はシンプルにナチュラルカラーの「トラウトショックリーダー」（フロロカーボン製）を使います。確かに寒い時期にはナイロンのほうが扱いやすいんだけど、新しいリーダーは茶色なので、黒部川とか水色のクリアな川が多い北陸では使いにくいんです。他の色も出してくれないかな（笑）」

——現在おふたりが使っているラインの、優れた部分を教えてください。佐藤「性能的な面でいえばまず、『Sスベック』は水切れが抜群に良くて、水を拾ってくる量が少ないので、厳寒期の釣りでラインローラーやガイドが凍るというトラブルが少なくなりやすい。ラインローラーが凍ったりすると、氷を解かす作業時間が必要で、そ

の間の釣りができないわけですけど、それが『Sスベック』は圧倒的に少ない。これは自信を持って言えます。水切れの良さは抜群ですね。実際に釣り場には違うラインを使う人もいるわけですけど、『Sスベック』を使っている釣り人はより長時間釣りができていると思います。それと、北上川は流れが緩く下流部なので水も汚れ気味で、ラインに汚れが付きにくいという意味でも水切れがいいのはとてもありがたい」

——ラインの長さにもこだわりがあるとか。川島「北上川は川幅が広くて、150mしかスプールに巻いてない場合、2度高切れするとその後釣りができなくなる可能性があるので、だから、200m巻きを用意している『Sスベック』の1択になります。それと、釣り場の特徴として他の釣り人と並んで釣ることが多いので、極端にアップに投げたりダウンを流したりということはやりにくいんです。必然的に自分の釣りができる範囲は自分の立ち位置の正面で、遠投した先のハンプなどを直撃して、20mくらい流したら回収してい

う釣りになります。探るエリアを広げるには距離を投げるしかない。だからラインが短くなってフルキャストできないという状況は避けたい」川島「私が使う『マックスパワーPE』は8本編みですが、8本編みは4本編みと比較して、全体的にしなやかですね。それと滑りも抜群なので飛距離も出ます。それとリールとの相性に関しても、厳寒期はスピニングの方がいい場合がありますね。凍ることを考えると『マックスパワーPE X8』より、水を拾いにくい『Sスベック』の方が安心でしょう」

——PEラインはナイロンより比重が軽いと思いますが、ルアーを沈ませる上で障害にはなりませんか。川島「素材としてはナイロンより浮力があるけど、細いラインを使うし水切れもいので短所にはなりません。浮力より、横風に弱いのはちょっと困りますね。正面の風にはそれなりに強いけど、細いラインを使っても横風には弱いですね」

佐藤「デメリットは何かしらあるけど、それを凌駕する使いやすさがあるってことだと思います。浮力を生かして、スプーンを上跳到ね上げる使い方もできますし」

VARIVAS SUPER TROUT ADVANCE MAX POWER PE X8



「高破断性工法」で強度に優れ、原糸1本、1本を緻密に編み込んだ超低伸度の8本編みハイエンドPEライン。ライン表面にスーパーフッ素加工を施したことで摩擦が少なく、滑りのよいなめらかさを兼ね備えている。摩擦系ノットも組みやすい。

VARIVAS SUPER TROUT ADVANCE MAX POWER PE X8 S-SPEC



ライン表面に「スームスールド加工」を施し、水を吸いにくくして飛距離と耐久性をアップさせた画期的なPEライン。カムフラージュ性の高いジャンバンゴールドカラーに幅1mのホワイトマーキングで視認性をアップさせている。

VARIVAS SUPER TROUT ADVANCE EXTREMIE SHOCK LEADER



しなやかさと強度を極限まで追求したナイロン製のショックリーダー。フロロカーボンのリーダーでは対応しにくい厳寒期の釣りや、適度な伸びが必要な場面です。

川島「それと、ライン自体の単価は高いので初期投資は掛かるけど、シーズンを通して使えるので結果的にコストパフォーマンスはいいと思います」——それぞれのホームリバーで、釣り人が使っているPEラインとナイロンラインの比率はどれくらいでしょう。佐藤「北上川では90%以上はPEですね。ナイロンはかなり少ない」川島「北陸では半々でしょうか。それでもかなりPEを使う人が増えてきています。増えてきて半々。昔は3割くらいでしたから」

将来的に、PEにこんな性能が加わればという理想はありますか。技術的に可能かどうかは置いておいて。川島「4本編みのようなコシがあつて、耐久性があつて、なおかつしなやかな8本編みPEですかね。できれば。それと、飛距離が分かるような色分けがあるとありがたいですね」

『スーパースoft』を経て

——サクラマス釣りとの出会いについて教えてください。

佐藤「きっかけは、僕の知り合いが持っていた72cmのサクラマスのはく製を見たことです。20歳だったから、1985年頃です。で、何で釣ったのって聞くとルアーだったという。その人が使っていたタックルは11〜12フイートのシーバスロッドに、14ポンドのナイロンラインでした。似たようなタックルを持って、自分も真似をして釣りに行ったら、釣れたんです。米代川の富根で、使ったルアーはスピンでした。2回目に行った時も釣れたんだけど、その後は2年間全然釣れなかった(笑)。

——雑誌『アングリング』に掲載されて大きな話題になった沢田賢一郎さんの二尺ヤマメの記事が89年で、ザウルスの則弘祐さんが雑誌でサクラマスを紹介したのが92年頃ですから、それより前というのがすごいんですね。

佐藤「初めてのサクラマスの時にどんなラインを使っていたかは覚えていないんですけど、その後で『スーパースoft』を使うようになったのは確かです。出会いというか、初期の『スーパースoft』のイメージという、釣具店のレジの横に、販促用にメーカーが用意したような『スーパースoft』専用のディスプレイがあつてね、それで高いんだろうなと思って思いながら横目で見ていたんです。最初はちょっとした憧れだったんです。そのうち『スーパースoft』を買うようになって使い始めたんですよ。使いやすいという理由で使い続けたのは事実ですが、これは結果的に思ったことです。けど、魚を掛けた時に凄く伸びがあるからバレーにくくて、評価が高くなっていたというのもあると思うんで

す。それでどんな人を使う人が増えていったんじゃないですかね。『スーパースoft』の後は、いろいろ試しているうちに、オレンジ色のライン(スーパートラウトアドバンスV E P)にいったん落ち着きました。その後で出会ったのが『スーパートラウトアドバンス・ビッグトラウト』です。『ビッグトラウト』は、ラインの伸びがちょうどいいというかね、ラインによって、伸びが少なすぎてバレーやすいと感じたこともあったし、V E Pの時代は色が目立つ方がいいなっていうのがあつて、オレンジを使っていたんですが、ビッグトラウトは色が水に馴染むというか、今はそれもいいなあって思っているんです」

——本波さんはバリバスのラインでいうと、何を使ってこられましたか。本波「雑誌社を通じてモリスさんにライン提供をしてもらったようになってますが、それ以前からバリバスのラインは使っていました。『プロタイプ』と『G X』っていうラインです。プロタイプはグリーンのラインで、ちょっと硬いラインだなっていう印象でした。それより前はストレーンとか使っていたんですけど……それで、色々使っていた時に、『スーパースoft』が出てきたんです。1993年に北海道で102cmのイトウを釣った時も、スーパースoftを使ってみました。その後で『ゲーム』を使ってみたが悪くなくて、現在でも使い続けています」

——『ゲーム』の発売から現在までの間に、『スーパートラウトアドバンス』とか『ビッグトラウト』とか色々出ているんですけど、その辺はどう感じましたか。本波「いや、冬は『スーパースoft』も使っていました。軟らかくてトラブルがないので、11月の北海道のイトウ釣りとかね。やはり厳寒期は軟らかいラインの方がいい」

——おふたりのよく行くサクラマス釣り場で、釣り人が使っているナイロンラインとP Eとの割合はどんな感じですか。本波「私が行くのは米代、赤川、小本(岩手県)のあたりですけど、大体半々です」佐藤「米代は、僕の感じだと半々……もしかすると、6…4くらいでP Eが多いかもしれない。P Eを使っている人って、ナイロンの経験がなくてP Eしか使ったことがないっていう人が多いような気がするんですが、逆に、何となく周りに影響されてナイロンからP Eに移行した人の中には、ナイロンに戻ってくる人もいます。やっぱりバレーるからね。他のトラブルも含めてやっぱりナイロンの方がいいやつ」

ナイロンはバレーない

——佐藤さんは、マグロ釣りではP Eラインを使いますが、トラウトではナイロンなわけじゃないですか。それは何故ですか。

佐藤「僕はナイロンラインに固執しているわけではないんです。海外のサーモンではP Eを使いますし。ナイロンを使う理由は何故かというところではないから。それは顕著ですよ。ナイロンだとちゃんと掛かった魚は、ほぼバレーないけど、P Eだと明らかにナイロンよりバレーる。ロシアだとサクラマスがたくさん掛かるんですよ。だからバラしても惜しくはないっていうか。P Eでもいいんですけど……あ、それより重要なのは、ナイロンの方がキャストニングが気持ちよく決まるんです。溪流にしてもサクラマスにしても、カッコいいキャストニングというか(笑)。……何と言うんでしょう。コンパクトな動きで、ロッドを曲げてブランクのしなりで投げるというか、自分としては理想のキャスト

——黒部川ではなく、米代川でもP Eラインの飛距離は必要ないですか。本波「ナイロンで十分ですね。感覚が悪いとか言いますが、ナイロンラインでも流れてきた葉っぱをフックが拾ったらすぐ分かりますよ。それと、川は大きな石とか障害物が多くて、ボトム起伏が大きいとリーダーを付けてもメインラインが障害物に触れることってあるんです。P Eは摩擦には弱いですが、よほどこまめにラインをチェックしないとダメですよ。ね。大きいのが来た時にラインが切れたっていう人は、P Eが傷ついていたことに気が付いてなかったってことじゃないかな」

根ズレへの安心感

——本波さんはどうでしょう。

本波「……まあ、ナイロンラインが一番扱いやすいっていうか。岩手のサクラマスの3月の解禁日とか、サク



「サクラマスは思ったよりも岸寄りの障害物周りにいる」という本波さん。根ズレへの安心感がナイロンラインを使用する理由だ。



ナイロンのメリットは「バレーにくさ」と「キャストの快適さ」だという佐藤健知郎さん。海外や海の釣りではP Eを使っている。

——何年か前に本波さんは、黒部川の取材でナイロンラインの20ポンドを使っていたけれど、周囲の釣り人の方が飛距離が出ていましたね。本波「それこそ飛べばいいってことじゃなくて、黒部川は流れが強く、速くの流忠に魚はいないんです。流心脇の巻き返しとか、そういうところの大きな石とかで、潮上してきたサクラマスは休んでいる。投網の人めね、岸から5mくらいのところ撃つんです。岸際で魚を捕っているんです」

VARIVAS SUPER SOFT



1986年の発売以来、ジャンルを問わず圧倒的な支持を得た「スーパースoft」。適度な伸びが従来にはない「強度」と「しなやかさ」を生んだ。

VARIVAS GAME



1998年にカタログに掲載された「ゲーム」。本波さんは20年以上の長きに渡ってこのナイロンラインを愛用している。同じ強度でワンランク下の細さを実現。

VARIVAS SUPER TROUT ADVANCE BIG TROUT



低水温など厳しいコンディションにおける大物とのファイトを追求した究極のナイロンライン。適度な伸びでバラを軽減し、表面のソフト加工で滑りを良くしている。佐藤健知郎さんの愛用ライン。

まとめ◎丹律章
司会進行◎山中光博(Give編集長)



写真右：本波さんが初めて釣り上げたメーターオーバーのイトウ。1993年北海道の金山湖で。ラインは「スーパースoft」。写真上：2007年、まだ米代川に冬季解禁があった頃の写真。この頃から「ビッグトラウト」を使用するようになった。写真下：こうした障害物が多い場所ではナイロンラインにアドバンテージがあると本波さんは言う。写真は岩手県の安家川。



ステイニングがあるんですが、そのためにはナイロンラインの伸びが必要なんです。ナイロンの伸びも利用しているというか……ナイロンラインのキャストの方が好きなんです。結局のところ」

——P Eライン愛好者の人に言わせると、ナイロンに比べて圧倒的に飛距離が出ると。それは間違いないと。その部分はどう捉えていますか。

佐藤「あの、もう川島さん帰られましたよね(この対談は12〜14ページ掲載の川島雅史氏、佐藤雄一氏によるP Eライン対談の後に収録された。川島雅史さんと佐藤雄一さんはすでに退席されている)。……あのですね、飛べ

て、その上に石を置いて固定してから、下流に回り込んで魚をネットですくったんです。その間、ずっと根ズレしている状態だったわけで、ナイロンだから踏ん張ってくれたけど、P Eラインだったらすぐ切れちゃったと思います」

——では、こんなラインがあつたらっていう希望はありますか。

本波「ラインの色なんです。魚から見にくいラインっていうのがいいですね。漁師言葉で「カッチ色」っていうのがあるんですが、簡単にいえばあずき色みたいな色で、この色が見えにくい色といわれているんです。漁網にあずき色みたいな多いじゃないですか。この色のラインを試してみようと思っています」

佐藤「僕は、格段に細くて強いのがあればやっぱりいいですよ。ナイロンラインの良さが伸びてバレーにくいことだと思うので、伸びるP Eっていうのがあれば試してみたい。P Eのいい部分、ナイロンのいい部分を両方取り入れたラインっていうのかな。そういうのがあればいいですね」



写真左上：佐藤さんが本流の開拓をしていた1990年代後半。鬼怒川にて。 写真右上：1990年代の前半、飯田さんが雑誌『Angling』に寄稿していた頃。山形県の小国川にて。 写真右下：飯田さんが学生時代に作っていたハンドメイドミノ「メゾン」。



モリスの
テスターになった頃

——現在皆さんは、モリスさんのテスターという立場で、バリバスのラインと関わっているわけですが、テスターになったきっかけを教えてください。

飯田「テスターになったのが正確にいつかという覚えていないのですが、モリスさんのお付き合いの始めは18歳くらいの頃です。40年くらい前ですね。ライズの原田さん（注…原田佐敏。平塚の釣具店「ライズ」店長。当時、ライズをベースにした「チーム・ライズ」というルアーフィッシングのクラブがあり、飯田さんはそのメンバーだった。メンバーにはバスのプロの河辺裕和さん、テーパー&シェイプの島津雄雄さんなども在籍していた）に「お前もこれ使えよ」と「スーパーソフト」

ト」を渡されたのが最初です。

——飯田さんはその頃、「メゾン（注…飯田さんのハンドメイドミノ）」と作っていた時代ですね。当時の飯田さんのトラウトフィッシングのメインフィールドは、芦ノ湖とか、溪流なら丹沢あたりですか。

飯田「そうですね。前後して『アングリング』とか雑誌の取材を少しずつ受けるようになっていって、少しずつ遠征も増えていったのかな」

——原田さんに薦められて使い始めた「スーパーソフト」ですが、印象はどうでしたか。

飯田「僕としては、『スーパーソフト』は国産ルアー用ラインの先駆けだったように感じています。それ以前は、『ストレイン デュボン』とか「ロイヤルポニール（ガルシア）」とか海外のラインを使っていたんですが、それに比

べて「スーパーソフト」はスプールの巻き癖が付かないのでスムーズにキヤスティングができて、スピニングリールに向けたラインだと思いました。海ではさらに愛用者が多かったですね。G.Tの釣りにも使われていて、万能なラインだったんです」

——その後、「スーパートラウト」を使うようになるわけですね。発売は1990年代の初めころで、これは初めてトラウトという冠が付いたラインだと思うんですが、印象はどうでしたか。

飯田「時代的に、雑誌も総合誌から専門誌に分かれていったタイミングです。『アングリング』はルアー&フライの総合誌でしたが、ルアーとフライが分かれるだけでなく、ルアーフィッシングも「ギジ」みたいなトラウトルアーの専門誌とか、バスの専門誌とかソルトルアーとかね。同時に、釣り道具も細分化していったという流れでトラウト専用ラインが発売になったんですよ。普通に使いやすいラインでしたけど、すでにその時代にはラインの基本性能が上がっていたので「スーパーソフト」を初めて使った時のような強いインパクトはなかったですね。『スーパーソフト』が凄すぎちゃったってことだと思えます」

——佐藤さんはいかがでしたか。

佐藤「私もモリスラインは『スーパーソフト』が最初ですね。その前は『銀鱈（東レ）』とか「ラーヂ（ライカ）」という餌釣り用の糸でルアーもやっていたんですが、ソフトが出た頃は、やっぱり柔らかくてトラウトに向いている、スピニングで使いやすいというのが正直な印象でした。600m巻きもあってそういう面でも使いやすいかった」

——福士さんも最初は「スーパーソフト」

ト」でしょうか。

福士「僕は釣り場が北海道なので、冬はガイドが凍るじゃないですか。ガイドがふさがった状態で魚がヒットするとラインが出ていかないから切れちゃうわけですけど、『スーパーソフト』を使っているとラインの伸びが吸収してくれるので、切れずに踏ん張ってくれる。だから、ソフトしか使えない状況というのがあって、PEがメインになるぎりぎりまで、冬は「スーパーソフト」を探して使っていました」

——佐藤さんという、今はメジャーな釣りになったけど当時はまだやっている人が少なかった、利根川の本流戻りヤマメとか短期降海型サクラマスという、そういう釣りの開拓者だったわけですけど、モリスさんのテスターになったのはどういった経緯ですか。

佐藤「戻りヤマメの釣りを始めたのは37、38年前で、その釣りが徐々に確立されてきて、少し注目されるようになって、『週間釣りニュース』に原稿を書いたりUFMウエダとの付き合いができたという感じで釣り業界にお世話になり始めたんです……その流れでモリスさんからもテスターやってくれるかと声が掛かったんで、それを受けたというかたちですね」

——いつ頃のことでしょうか。

佐藤「テスターになったのは、ギジーさんに原稿を書き始める少し前だったのかな」

——ギジーの創刊が1997年ですから、1995年ぐらいと考えていいでしょうか。

佐藤「その頃だと思います」

——福士さんどのような経緯で、福士「モリスさんとうって付き合いが始まったか、その時期は覚えていないです（笑）。確か、千歳にある

「清竿堂」という釣り具店で「スーパーソフト」か「ゲーム」をすめられて使っていて……そのうち、モリスさんから「うちのライン使っているならテスターに」ってなったんじゃないかな。同時期に知り合いだった飯田さん経由で、モリスさんを紹介されたという記憶もあるんですけど、どっちが先かは分かりません」

——当時の釣り場としては千歳川とか支笏湖とかが多かったんでしょうか。

福士「20代の半ばから後半の年代だったので、北海道中を走り回っていた時期ですね。釣り道具は車に積みっぱなしで、あそこが釣れるって聞いたら、仕事のあと寝ないで釣り場に直行するような釣りをしていました」



写真左：北海道千歳市にあるプロショップ「清竿堂」。福士さんとモリスの出会いはここから始まった。 写真右：「広大な北海道をまさに縦横無尽に走り回っていた頃」。



TOMOYUKI FUKUSHI

トラウト王国・北海道を舞台に、アングラーとして、ハンドメイドビルダーとして、釣り具メーカーの代表として、横断的に活躍している熱血漢。北海道千歳市在住。

SHINJI SATO

利根川、鬼怒川、魚野川など主に首都近隣の本流を舞台に活躍する大物釣り師。脈釣りに応用したドリフト釣法が得意で、ルアー開発にも携わる。埼玉県北足立郡在住。

SHIGEHIRO IIDA

「ラビド」「アレキサンドラ」など人気ミノを輩出するバームスのルアーデザイナー。溪流ミノーイングのバイオニアかつ第一人者。神奈川県在住。

飯田 重祐 佐藤 慎司 福士 知之

溪流、本流、北海道 それぞれのラインセレクト

神奈川に住みながら東北や北海道へも遠征する飯田さん、埼玉在住で関東のスレた魚を相手にすることが多い佐藤さん、北海道でスケールの大きい釣りを展開する福士さん。釣り場環境が異なる3人の、それぞれのライン論。

ナイロンからPEへ クリアライン VS 蛍光ライン

――飯田さんは、『スーパーソフト』『スーパーラウト』『スーパートラウトアドバンス』とナイロンラインを使った後でPEラインへと移行していくわけですね。ギジールの取材ベースでいうとPEに変わったのは2011年から2012年のようです。飯田さんがPEに変えた理由を教えてください。

飯田「モリスさんのラインではないんですけど、最初に使ったPEの印象は最悪で、とにかく使いづらかったんです。ガイドに絡むし、指にささくれとかあると、すぐラインが毛羽立ってしまう。だからすぐ使うのはやめました。しばらくしてからモリスさんのPEラインの開発に関わるようになって……それが2011年から2012年の少し前なんですよ。多くの試作品を使っている中で、コシがあつていいラインがあつた。非常に使いやすく、これはいけるかなっていうのが『ダブルクロス（スーパートラウトアドバンス・ダブルクロスPE）』だった。それ以来ほとんどナイロンは使っていませんね」

――PEラインを使うことで釣りはどう変わりますか。

飯田「ラインスラックのコントロールとか、ライン処理が忙しくなりました。忙しいけど、感度には勝てなくて……使っているうちにライン処理も精度が高くなってきた気がします。釣りつて、これまで革新的な出来事がいっぱいあったと思うんですけど、ラインが変わると釣りが全く変わるっていうのを体験したのがPEの登場でした。ロッドに比べるとラインの進化は凄まじいですよね。改めて思

でもナイロンよりフロロの方が屈折率が小さいので、気が付かれにくいんです」

――ちょうどラインの色の話になったので、他の方にもラインの色についてお聞きしたいのですが、飯田さんは比較的派手な色を使うことが多いですよ。

飯田「僕なんかはストレーン世代（注：ストレーンには少し紫がかったクリアカラーと蛍光イエローのラインがあつたが、ここで飯田さんが言っているのは黄色いストレーンのこと）で、あれがカッコいいと思っていました（笑）。昔から派手な色に慣れているので。色付きのラインが魚に見られているのかどうかは分からないなあ。それと、昔モリスからオレンジと黒に色分けされたナイロンラインが出ていたんです。オレンジと黒が一定間隔で繰り返されるんですけど、あれは良かった。見やすい。まあ理想を言えば、キャストの時は派手な色で、水の中では目立たないクリアになるラインがあればいいんですけどね（笑）」

――佐藤さんはカモフラージュ系のラインしか使わないですよ。

佐藤「やっぱり魚にはラインが見えているという考えがあるので、その意識が他の人より強いのかなとは自分でも感じます。着色ラインは視認するのが楽だけど、関東近辺のフィッシンググレッシュャーの強い釣り場で使うのはクリアがほとんどですね。しかもその上で、魚にラインを見せないようなルアーのトレースラインを考えて釣りをしています。それと、水中にあるラインは見られるけど空中なら見えないと思うので、ロッドティップを高く上げてラインをできるだけ水の中に入れないような釣り方も多

用しますね」

います」

――具体的に何がどう変わるんでしょうか。

飯田「キャストインクの最後でルアーが着水する時に、人差し指でフェザリングするわけですが、ナイロンだとそれだけでラインが伸びるわけですね。短距離のキャストでも伸びるのが分かります。だからナイロンでは釣り自体が曖昧にならざるを得ないけど、PEならラインが伸びないので曖昧さが無くなって、ドンピシャのダイレクタな釣りになるんです。これは全然違う」

――では、飯田さんのラインの使い分けを教えてください。

飯田「海とか湖とか本流など、大場所では基本的にPEを使います。飛距離と、遠くの魚を確実にフッキングしたいならPEですよ。先ほど言ったように、ガイドが凍る厳冬期はナイロンですけどね。大場所じゃなくて



PEラインへの転換で釣りが飛躍的に変わったという飯田さん。写真はその後数年後に訪れた山形県の最上川水系。見事な雄の秋ヤマメを釣り上げた。

も、北海道では小さな溪流にでつかいニジマスがいたりしますから、PEラインの強さが必要なことがある。逆に言えば、魚が50cm以下ならナイロン4ポンドだけでいいと思っています。40mmのミノーとか、使うルアーが小さいから、ルアーに近い部分のラインはできるだけラインを細くしたい。PEだとメインラインを0.6号まで落としても6ポンドとか細いリーダーでシステム組むのが難しいので、細いナイロンの直結に落ち着きました」

――佐藤さんは、ラインの使い分けをどのようにしていますか。

佐藤「私は、PE、フロロ、ナイロンを状況次第で使い分けます。PEにはPEの特性があるじゃないですか。ルアーの飛距離が伸びると感度が悪くなるっていうのがあるので、大場所感度と操作性のいいPEラインを使うっていうのは正しいと思うんです。だから、バリッとした操作性が欲



魚野川のプラチナレインボー。使用ラインは「アドバンス」。

――富士さんのラインカラーはいかがでしょう。

富士「蛍光ラインですね。北海道の溪流で、虫のトップの釣りをするんですけど、リトリープせずに流すだけなのでルアーを見失うことが多いんです。だから、視認性のいいラインが使いやすく……さっき飯田さんが言った、オレンジと黒のシマシマのラインも使いやすいかったですね」

記憶に残るライン 今、愛用しているライン

――「自分で気に入っているライン、記憶に残っているラインを教えてください。」

飯田「さっきも話に出た『ダブルクロスPE』ですね。このラインは開発から関わっているし、仲間が使っている他社のラインとか使わせてもらったりもするけど、やはり使いやすい。ひ



写真左：黒部川でのファイトシーン。この後痛恨のバラシ。写真右：利根川で手にした68cm。佐藤さんのベストフィッシュ。

つつ記憶に残っているのは、ラインのテストを兼ねて東北に行った日のことで、まだラインの色も決まっていな

い段階だったんですけど……たいして大きな魚を釣ったわけじゃないけど、PEラインの快適さを感じたっていうことを凄く覚えています。何だろう……ナイロンウェーダーを履いていた時代に、初めてゴアテックスのウェーダーを履いた時のような衝撃という快適さを感じましたね」

――革命的な進化だったんですね。最初から透湿防水のウェーダーを履いた今の釣り人には、このたとえば分からないかもしれないけど（笑）……ところで、『ダブルクロスPE』には色が2色ありますけど、どちらを使いますか。

飯田「ライトグリーンと蛍光オレンジと両方使いますよ。時間帯によって見やすい見えにくいという違いもあって、たとえば、夕方とか日陰とかは

オレンジが見にくいのでグリーンの方がいいですね。とはいっても、日陰だからといってピンポイントでラインの色を変えるわけにはいきませんけど……」

――モリスさんにもPEラインは何種類ありますが、ダブルクロスは具体的にどのような部分がい

いのでしょうか。

飯田「僕はラインの素材のことか素人なんですけど、このラインはエステル4本とPE4本の8本編みらしくて、表面が少しざらざらしていて、ライン自体にはコシがあつて、キャスト、リトリープ、ビックアップという一連の動きの中で、ベールに絡むようなトラブルが極めて少ないんです。エステル成分を混ぜたことで、コシが出て水馴染みも良くなっているというところですよ」

――逆のいい方をすれば、飯田さんが考える使いにくいPEとはどんなものでしょう。

飯田「釣りの途中でトラブルの多いラインですね。ラインスラックが出た時にガイドに絡むとか、スプールに緩んだ状態で巻き取られるのもトラブルの元です」

――では次に、佐藤さんの記憶に残るラインについてお聞きます。

佐藤「利根川で68cmのサクラマス釣ったことがあるんですが、その時に『スーパーラウトアドバンス』を使っています。この釣りのことは記憶に残っています。上流の方で釣ったので6ポンドだったんですが、激流の中でよく耐えてくれたなあって思いましたね。しかもその日新しく巻き換えたラインではなく、4、5回使ったナイロンだったんです」

――利根鱒は短期降海型のサクラマスとか戻りヤマメとか言われていて、そこまで巨大化するの



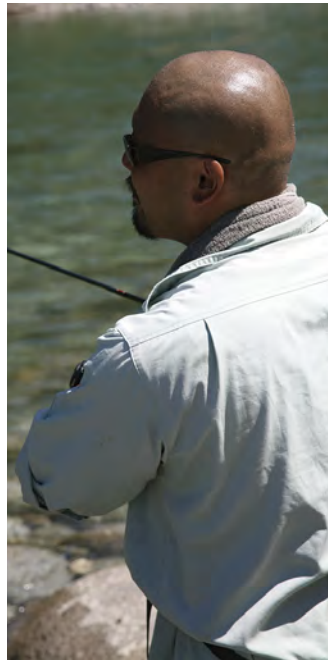
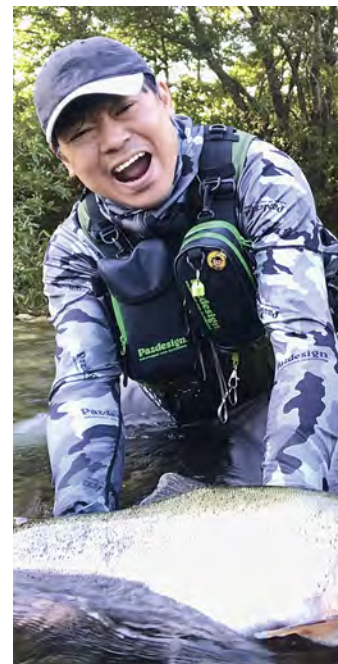
ルアーのトレースコースが見やすく、積極的にアクションを掛けるアングラーに支持される蛍光ライン。一方、魚への警戒心から嫌うアングラーも。写真は「ダブルクロスPE」の2色。

VARIVASと私

フィールド、ターゲット別のセレクト

アングラーの数だけ、いろいろな釣りがある。
それぞれのスタイルや嗜好も様々で、
それに応じて使うラインも異なる。
5人のアングラーのフィッシングライン・ストーリー。

阿部博和
沖耕太郎
内藤努
風間俊春
白土高利



トップウォーター・手にした魚のフランク。
福士さんは魚のサイズや釣り方でナイロンとPEを使い分けている。

いんですね。68cmというのは衝撃でしたね。
佐藤「アドバンスはクリアではなくてミスティブラウンという着色ラインなんです。蛍光よりは魚に気づかれないだろうし、何より、他のラインと比較して細いの強いという点が気に入っています。それとPEラインでは、『マックスパワーPE（スーパートラウトアドバンス・マックスパワーPE X8）』が好きですね。今のバージョンはトラブルも少なくなっただけ、なんと言っても強度が凄い。サクラマスも含めて、大きな魚にはこれがベストだと思っています。ギジの取材で黒部川に行つて、編集長の前でサクラマスをバラしたことがあつて、その時はナイロンを使っていたんですけど、PEにしておけば良かったと思いますね（笑）」

「福士さんはいかがでしょう。」
福士「大きな魚がいない釣り場で使うナイロンは、『サイトエディション（スーパートラウトアドバンス・サイトエディション）』ですが、強く記憶に残っているという点では、『マックスパワーPE（スーパートラウトアドバンス・マックスパワーPE X8）』ですね。初めて鳥牧の海アメで使ったんですけど、魚が遠くてルアーが届かなかったので、いったん車に戻って、それまで巻いていた『ゲーム』の10ポンドからPEに巻き換えましてね……そして、飛距離が凄く伸びて。射程が広がったので魚も結構釣れて……あれは感動しました」

「では、最後のテーマなんですが、こんなラインがあつたらいいなという、個人的な希望を聞かせてください。」
飯田「とにかく細くて強いラインかな。モリスさんに聞くと、PEだけで編んだ方が強度的には高くて、ダブルクロスのようにエステルを混ぜると多少弱くなるらしいんですが、あのトラブルの無さを維持したままさらに強いラインを作ってほしい」
佐藤「私も似ているんですが、細くて強くてもコシもあるPEが欲しいですね。飯田さんがお気に入りのダブルクロスは、コシがあつて使いやすいけど、やはりちょっと弱いと思うんです。逆にエリア用のPEの中には強さは十分だけど、今度はコシが足りないのがある。それでPEとフロロのハイブリッドで0.2号とかの低番手のラインってどうかと思うんです。PEとハイブリッドするのに、エステルよりフロロの方が強度が出ると思うので」

「基本的には釣り糸というのは、太い方が強いわけで、細くて強いラインというのは相反する性能を求めることになりますから、メーカー側からすれば厳しい要望でしょうね（笑）。さらに使いたいようにコシを出すにはエステルなど硬い素材を使う必要があつて、でもそれを使うと強度は落ちる。使いやすい、でも強く……なかなか難問です。」
福士「マックスパワーPEのラインナップに、視認性のいい蛍光オレンジカラーを加えて欲しいです。海で使うことを前提にすると、水が緑色に濁ったりするので、ラインはオレンジ系の方が見やすいんです。ナイロンラインは蛍光カラーを使いますが、できたらルアー付近はやはりクリアの方がいい気がするので、50cmごとに蛍光とクリアに色が分かれているラインがあれば、ルアーの近くだけクリアという選択ができて便利だと思います」

「蛍光オレンジのマックスパワーは技術的に難しいものではないんですけど、以前にオレンジと黒のラインが発売されていたことを考えると、クリアと蛍光のナイロンラインも、必要次第で発売もあるかもしれません。視認性を使いやすさととらえるかどうかは個人によって意見が分かれますが、3人がラインに望むのは、細くて強く使いやすいということ。釣り場環境は全く異なるにもかかわらず、理想は共通しているようです。実現可能かどうかは別として、ですけど。」

まとめ◎丹 律 章
司会進行◎山中光博（左：編集長）

福士さんは、トップウォーターでは蛍光ラインを使うことが多い。

VARIVAS
SUPER TROUT ADVANCE
SIGHT EDITION



視認性と強度を重視して開発されたナイロンライン。ライトニンググリーンは、晴天、曇天、逆光とどんなシチュエーションでも見やすいのが特徴。福士さんの愛用ライン。

VARIVAS
SUPER TROUT ADVANCE



高密度分子結合製法（VA-G製法）で、同強度でもフランク細いナイロンライン。ミスティブラウンのナチュラルカラーも魚に見破られにくく、佐藤さんの信頼も厚い。

VARIVAS
SUPER TROUT ADVANCE
MAX POWER PE X8



強度に優れ、表面にスーパーフッ素加工を施した超低伸度の8本編みPEライン。滑りのよいなめらかさを兼ね備え、摩擦系ノットも組みやすい。福士さんの対大物用ライン。

VARIVAS
SUPER TROUT ADVANCE
DOUBLE CROSS PE

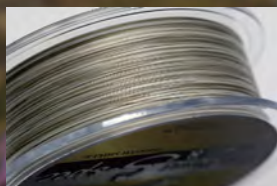


PE素材と高比重のエステル素材を燃り合せた、コシのある8本編みのPEライン。飯田さんが開発に携わり、溪流アングラーから絶大な支持を得ている。



**VARIVAS SUPER TROUT ADVANCE
MAX POWER PE S-SPEC**

ライン表面に「スームスシールド加工」を施し、飛距離と耐水性をアップさせた画期的なPEライン。中禅寺湖の釣りから生まれた。



つ張り強度より、長時間ある程度の性能を維持してくれるという性能です。カナタに遠征した際は4日間で60〜70cmのレイクタウトを約140本、1釣りしましたが、使用後のラインをモータースに渡して計測してもらったら、まだ80%の強度が残っていたらしいです」

最後の水がみとは、PEラインが水中を移動する際の抵抗のことだ。「PEラインは編み糸ですからどうして凹みができる。その凹みででき

すぎる色は良くない」
しかも、1m間隔で色が変わるのの
で、リトリープスピードが分かりやす
く、リトリープの距離もフォールの距
離も判断しやすい。フォールでライ
ンが出た色数を数えておけば、2キヤ
スト目からボトムに着底するタイミ
ングが予測できるので、アタリも取り
やすいという利点もある。

「耐久性」というのは、新品状態で引

「シャンパンゴールドはいい換えれば落ち着いた薄い茶色なので、これは白枯れの山の色。白は雪山の色。解禁当初の中禪寺湖の景色に溶け込む色で魚から見えにくく、釣り人からは見やすい。もちろん蛍光色にすればもっと見やすいですけど、魚には気づかれやすい。とくに湖では、ルアーを魚の向こう側へキャストしてから手前にリトリブしてくるので、魚の上をまずはラインが通って、その後でルアーが通過するわけですので、目立ち

る。
視認性は平たくいえばラインカラーだ。『Sスペック』は、1m間隔でシヤンパンゴールドと白が繰り返される。

試作とテストと改良を繰り返しながら、長期間かけて完成したラインなので、阿部さんは満足しているというのが、その中であえて弱点を探してもらった。

「テストに3シーズン、発売からさらに4シーズンほど使っていますが、完成度は高いと思います。ただ、PEラインは横風に弱いので、そこが解消されれば、さらに良いラインになると思いますね」

写真◎花塚伸幸、まとめ◎丹律章

溪流の居着きヤマメを追い求める内藤努さんは、ボサ川や枝沢といった細流での釣りに強いこだわりをもつ。「その理由はふたつあります。ひとつはゲーム性の高さ。ススキや木々などに覆われたボサ川ではとくにキャスティングの部分でテクニカルな要素を求められます。もうひとつは個性豊かな魚がいること。狭い空間ながら、わずかな環境の違いに合わせて魚の容姿も実に多彩です。そして、釣りづらいタイプの川だからこそ、魚も残りやすい。尺を超えるような居着きの大型魚と出会う確率も意外と高いんですよ……そう、私にとって細流の釣りとは宝探しみたいなものです」よりテクニカルな釣りを求めるうちに、開けた溪流から徐々に細い流れへと足が向くようになったと言う。

そんな内藤さんの釣りを支える要のひとつがPEラインの存在だ。飛距離性能と水切れの良さに惹かれ、溪流での使用は6シーズン目となる。現在の主力は「スーパートラウトアドバンス」「マックスパワーPE」X8の0.6号。超低伸度とシルクのような滑らかさはもちろん、シャンパンゴールド＋ホワイトという比較的抑え目なカラーが採用されていることも、このラインを選ぶ大きな理由のひとつに挙げた。「水面がカガミのような狭いポイントでは、ラインの先につけたリーダーさえも魚を警戒させてしまう。さらに細流では8割ぐらいが直アップからのドリフトの釣りになるため、ラインの水面への接触は免れませんから、できるだけ水色になじみやすいカラーの方が安心です」



VARIVAS SUPER TROUT ADVANCE MAX POWER PE X8
ライン表面にスーパーフッ素の膜を纏わせ、滑りが良く、しなやかなPEライン。原糸1本、1本を編み込んでいるためムラがなく、ノンストレス。溪流でも使いやすい。



ナイロン、PEともに魚に警戒心を与えないカモフラージュカラーがお気に入りの理由。

VARIVASと私 *Tsutomu Naito*



「プロショップオオツカ熊谷店」勤務。プライベートでは北関東や会津地方の小溪流を中心に精力的な釣行を重ね、20年以上にわたリバーマークの残った誰の尺上ヤマメを追い続けている。

内藤努

細流のヤマメ狙いに最適なナチュラルカラーの「X8」

一方、ライトグリーンや蛍光オレンジなど視認性を重視したカラーのラインはテスト以外ではほとんど使わないと言う。

「極端な話、ラインをほとんど見ないで釣りをしています。溪流ではかれこれ16、7年同じ竿（イトウクラフト社・エクスパートカスタム）を使っていることもあって、この感覚で振れば、このルアーならこの距離が出る、というふうに、ラインを見なくても釣りが成立するからです」

このように、すでにPEラインを軸とした細流釣りの体系を完成させた観もある内藤さんだが、ラインスペックの向上とさらなる展開に期待を寄せている。

「例えば、エリア用のように0.6号よりも細かいクラスのPEラインがあれば理想的ですね。水切れも良いし、飛距離も出ますし。ただし、同時にスレに対する強度がないと細流のような場所では不安が残ることを考えると、せめて0.5号があれば嬉しいですね。あと欲を言えば、シンキングラインです。高比重の専用PEラインはまだまだ多くはありません。狭くて深い場所がないポイントでも、ラインを沈めてルアーのレンジを下げることで、3、4メートルとわずかな距離でもいいからルアーを追わせて、魚との駆け引きを味わいたいんです」

（まとめ◎中野正貴）

VARIVASと私 *Kotaro Oki*

沖耕太郎

高原川の怪物虹鱒 『アドバンス』で獲った80cm



自らが漁協の組合員でもある高原川で、スティックに大物を追い求めるロコアングラー。2018年の80cm、6.49kgの怪物虹鱒は多くの釣り師に夢を与えた。『Hoozuki』ブランドのハンドメイドビルダーとしても活躍中。

奥飛騨の名川として知られる高原川。大イwanaに大ヤマメ、モンスターレインボーの本流として、近年ますます脚光を浴びている。この川のほとりで生まれ育ち、餌釣りの手法をルアーに応用した独特のスタイルで、次々と結果を残しているのが、沖耕太郎さんである。とりわけレインボーには力を注いでおり、3年前の80cmをはじめとした、数々の大物実績には目を見張るものがある。

「僕が使用しているのはナイロンの『アドバンス（スーパートラウトアドバンス）』ですね。この20年、他のラインを使ったこともありますが、結局すぐはこのラインに戻りました。ご存じのように、野生化したレインボーの走りは半端ではありません。瞬間的にもすごい力が加わることもあります。そんな時にナイロンラインの

がここまで成長するのにどんな試練があったんだろうと想像すると、そこに壮大なロマンを感じると、そこに大物を狙う際、沖さんが最も重視しているのが「ライ」と「フック」。ロッドやリール、ルアー以上に神経を遣うという。とりわけラインに関しては一家言ある。

伸縮性が大きなアドバンテージになるんです。あとは根ズレへの強さですね。大型は強い流れのボトム、とくにストラクチャー周りに貼り着いていることが多いですから。『アドバンス』の場合、同じ強度でもワンランク細いものを使用できるし、感度的にも問題はないと思っています」

「高原川は、全国的に見ても水質が良く、かなり水がクリアな河川です。なのでいわゆる蛍光色の付いたラインは魚から見破られやすいと思っています。実際、仲間内で試してみると、カモフラージュ系のほうが実績も高いようです。『アドバンス』の場合にはミスティブラウンというカラーですが、この透明に近い色が高原川の水に同化するような印象で、存在感を消してくれるように感じています。これも大物狙いで愛用する理由のひとつです。2018年の80cmも『アドバンス』の12ポンドで獲りました」

VARIVAS SUPER TROUT ADVANCE



高密度分子結合製法（VA-G製法）により、同じ強度でもワンランク細いラインが使用可能なトラウト用ナイロンラインの定番。ナチュラルなミスティブラウンのカラーも魚に見破られにくく、沖耕太郎さんが絶大な支持を寄せるライン。



左手でフェーザーリングしながらルアーをポイントに送り込む。カモフラージュ性の高いラインカラーで魚に警戒心を与えない。

最後に、今後どんなラインがあるとういか聞いてみた。「やっぱり、さらに高強度、極細のラインですかね。ラインが細ければ大物の警戒心も薄れますから。もちろんナイロンラインでという但し書きはつきますが（笑）。それと1000m巻きや2000m巻きのももあるといい。僕の場合、とにかく消耗が激しいですから」

（まとめ◎山中光博）



こちらは2017年の春に釣り上げた76cmの雌。高原レインボーは魚体が美しく、野生化した凄まじいファイトが魅力だ。



VARIVASと私

白土高利

Takatoshi Shirato

北海道帯広市在住。千勝川水系を中心に大型レインボートラウトを数々と釣り上げるルアーマン。デカニジ(デカイニジマスの略語)ハンターの異名で知られている。

北海道のデカニジ 必要なのは『マックスパワーPE』の強さ

私が住む北海道十勝地区は太平洋側に位置する道東の一部で、全国的にも有名な畑作や酪農の中心地。豊かな大地の源である十勝岳を水源とする一級河川の母なる川・十勝川(流域面積は全国第6位、北海道第2位)が流れる、北海道を代表するトラウト王国である。

十勝地区のトラウトフィッシングで断トツの人気ターゲットは、大自然で育ったワイルドレインボード。レインボートラウトは強い流れの中で鍛えられた強靱な尾鰭を使って狂暴なフアイトをする。とくに50cmを超えるデカニジはひと筋縄ではキャッチするのが難しい。

日頃からその50cmオーバーのデカニジを狙う私が使用するラインシステムを紹介しよう。メインラインは『スーパートラウトアドバンス マックスパワーPE X8』と『マックスパワーPE X8(ライムグリーン)』の1号だ。PEラインのメリットは、伸びが無いことでショートのバイトを伝達してくれることだろう。数多くのPEラインを使ってみたが、これらのラインのしなやかさが、デカニジハントにマッチする。さらに、完全8本撚りである点もトラウトゲームを強力にサポートしてくれる。

PEラインにはショックリーダーが欠かせないが、私はスピニングとベイトで、フロロカーボンとナイロンを使い分けている。

より繊細さに勝るスピニングロッドとドラッグ性能に優れたスピニングリールには、耐磨耗性に優れ、高感度で低伸度のフロロカーボンが最適なので『スーパートラウトアドバンス・ビッグトラウトショックリーダー(フロロカーボン)』がベスト。ベイトタックルの時にはデカニジに主導権を握らせないために、パワーで真つ向勝

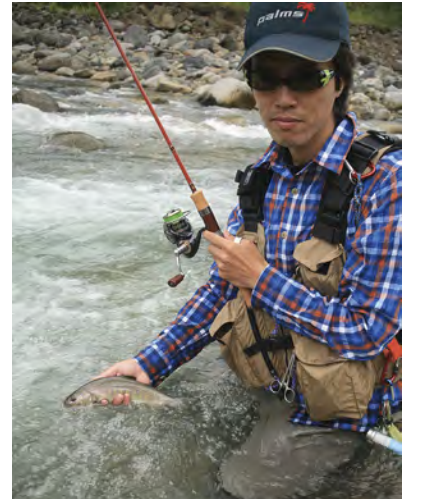


デカニジに使用しているラインシステム。上の65cmのニジマスは『マックスパワーPE X8』のライムグリーンで仕留めた。

VARIVASと私

Toshiharu Kazama

風間俊春



生まれ育った秩父の谷川をホームグラウンドとするサンデーアングラー。餌釣りやフライフィッシングなど、溪流釣りの幅広い経験に裏打ちされた独自のルアーフィッシングに定評がある。モーリスのほか、バームスのフィールドデスターを務める。埼玉県秩父市在住。

「見える」と「見せない」 高視認性PEでナチュラルに釣る!

埼玉県秩父で生まれ育った風間俊春さんは、秩父山地を流れる荒川上流域で溪流釣りを覚え、現在も日々ここで腕を磨いている根っからのローカルアングラーだ。

一方、仕事の都合で風間さんの釣行は週末に限られるが、釣行に丸一日を費やすことはほとんどない。釣り場のほとんどが秩父市街の自宅から近いこともあるが、別の理由もある。

「私は釣り場ととにかく目を酷使するため、一日を通しての釣りは難しいんです。秩父の川は谷川の割に開けている上、水はかなりクリアな状態なので、川を歩けばすぐに魚が走る。ですから、常に見えるだけ遠いポジションから魚の動きを注視する必要があるんです」

「見る」ことに人の何倍もの労力を

費やす風間さんは、昔から視認性の良いラインを選んできた。現在使用しているのが「スーパートラウトアドバンス」[ダブルクロスPE]の0.6号。視認性を重視した2種類のカラーラインナップが気に入っている。「先行して使ったのがライトグリーン。ただし、流れに木々がオーバーハングしている場合、光の加減で若干見えにくいことがありました。そこで蛍光オレンジに切り替えたところ、溪流では見えにくいというシチュエーションはなくなりました」

風間さんはいざポイントに立つと、流れのかなり広範囲を見渡す。すでに攻められた手前側の流れを捨て、何本もの流れを跨いだ先に大物が潜んでいるような、わずかな竿抜けポイント



SUPER TROUT ADVANCE
DOUBLE CROSS PE

PE素材と高比重の素材を撚り合わせたことでPEラインでありながらもコシがあり、キャストビリティやルアーの操作性を向上させた8本撚みのPEライン。溪流アングラーに人気。

を見つけ出す。ただ、前述したように、クリアで開けた流れに潜む魚たちは相当ナーバスなはず。そこで風間さんは、ロッドを立てて気味にし、メインラインをなるべく水面につけないようにして、魚にラインを見せない工夫をしている。

「もともと溪流でも本流でもポイントとある程度の距離を取りながらルアーをドリフトさせる釣りがメインのため、ロッドを立てて操作する必要があります。魚に急なインパクトを与えるのではなく、ナチュラルに誘っていく中で、スイッチが入る瞬間を待つのが私のスタイル。狙った魚を一投で獲るのではなく、周辺にいる小魚や見えていない魚を散らしながら、本命を獲る確率をいかに上げられるかをイメージしています。地味なカラーのラインの方が良いのかもしれないですが、ポイントを広く見ているうちに、どうしてもルアーを見失いがちなので、ラインの視認性の高さに助けられている部分があります」

この蛍光オレンジのPEラインが、いまの自分のスタンスに最もアジャストしていると語る風間さん。最後に挙げてもらったのはリーダーについてのリクエスト。

「ショックリーダーにはフロロをメインに使っていますが、ショートバイトの魚を相手にする機会が多いこともあって、伸び率がナイロンに近いフロロラインがあれば理想的ですね」

(写真◎風間俊春、まとめ◎中野正貴)



土日釣行で先行者の後を釣りながら、竿抜けから魚を誘い出すには、繊細な釣りが要求される。

安達俊雄

老舗ロッドメーカー・UFMウエダで長きに渡って開発に携わってきた安達俊雄さん。彼のハンドメイドブランドが『モリスグラファイトワークス』である。◦温故知新◦と言われる彼のロッドビルディングの秘密に迫る。



安達さんの入社から5年、満を持してリリースされたモリスグラファイトワークスのファーストモデル。グリップやリールシートなどのパーツも、すべて安達さんの設計によるもの。細部に至るまで彼のこだわりが結晶している。



“温故知新”のロッドビルディング

UFMの文脈を継承しつつラインの性能を最大限に

「新しくて斬新なことをしようとは思っていないんです。昔から培われてきたロッドビルディングの知識をいかして、その精度を上げたり、現代風にアレンジしながら再構築する……。簡単に言えば《温故知新》なんです。新しい発想のものより、そこにこそ心に響くようなものがあるような気がするんです」

これが、モリスグラファイトワークスのビルダーである安達俊雄さんのポリシーだ。彼が、前職のUFMウエダ社を退職し、現在のモリスに入社したのは2013年のこと。アフターサービスへの対応のため、同社の解散から一年遅れてのことだった。モリス社は老舗のラインメーカーだが、管理釣り場のトラウトやアオリイカのエギングなど、ニッチなジャンルのロッドも少数ながら生産している。安達さんが加入したことにより、すぐにでも新たなネイティブトラウト用ロッドが発表されるのではないかと思っていたのだが、事はそう簡単には進まなかった。

「始めは梱包や配送の仕事を手伝ってました。その後で管理釣り場用ロッドのお手伝いをしたり、ワカサギロッドの穂先を製作したり……。なかなか先に進まなかったのは、やはり職人ばかりのような環境から大きな会社へと転職したこともあって、僕自身も戸惑っていたのかも知れません。それとモリス社は釣り糸がメインの会社ですから、その性能を極限までいかすことのできるロッドとはどんなものだろうと、とくに耐久性の面であれこれ模索していたのも理由の一つです」

5年の沈黙を経て極薄グラスを採用した理由

新たなネイティブトラウトロッドが同ブランドからリリースされたのは、実に彼の入社から5年後のこと。フルグラスの「TRD1501FS」を筆頭に3本のロッドが発表された。カーボンロッド全盛の昨今において、グラスロッドのみだったこともあり、当初は大きな話題となったが、実はここに件の「ラインの性能を極限までいかすことのできるロッド」という問いへの答えが隠されていた。

「ちょうどエリアロッドのリニューアルを手伝っている時に、最新のグラス素材と出会ったんです。全部で6種類ぐらいあったんですが、その中に主に海外用のロッドやカーボンロッドの耐久性を上げるために使われるもので、レジンを経限まで減らした軽くて薄いものがあつたんです。シートの反対側が透けて見えるような薄さでいわゆる『翼ガラス』と呼ばれているもの。国内ではアユの友釣り用の竿や磯竿など長い竿の強度を上げるために、竿全体のごく一部に使われています。値段もかなり高価なのですが、このグラスを使えば、カーボンロッドのような軽くてハリがあるグラスロッドが作れるかもしれないと思っただけです」

もともと、往年のグラスロッドに馴染みのある人にとっては、いくら最新素材を使ったところで、あの独特の粘りやタルさ、ひいては腰の抜けるような感覚は払拭できないと思う人もいるだろう。だが、安達さんにはグラス素材でもロッドに適度なハリを持たせるノウハウを、長年のロッド製作の経験から知っていた。それが《バットからベリーにかけてのテーパーを急角度にする》というもの。そこさえク

Morris Graphite Works

40年前のマンドレルフルグラスとハイブリッド

リアできれば、軽くてハリがあるカーボンの特性と、粘り強くバラしくいというグラスの長所を併せ持った温故知新のロッドの製作が可能だと考えた。

「内径の太さの3乗分ハリが強くなる……。これは昔私が先輩から教えてもらったことなんですけど、竿は力を加えると、どうしても楕円になるうとするんです。グラスの場合にはとくにその傾向が顕著です。簡単に言えば、その動きを急テーパーにすることで抑制する訳ですね。そうすると横方向へのブレが少なくなるので、ハリがあつて高感度なものに仕上がるわけです。今の時代にグラス素材に着目した理由は、カーボンよりも圧倒的に耐久性が上がるということもあります。縦繊維のカーボンと違って、グラスは縦横の糸のようにあらゆる方向に密になって圧縮されているので、強度があるんです。だから、より薄い素材を採用することも可能なんです。私見ですが、カーボンで同じ厚さのシートを使つたら、おそらく強度面で問題が出てくると思います。モリスの場合には、ロッドの専門メーカーではないので、ウエダの時以上に耐久性に優れたものを作らなければという思いもありましたから……」

かくして、ニューロッドの開発に着手し始めた安達さんだったが、すぐにトラブルが発生した。それは竿づくりに欠かさないマンドレル（芯金）。竿のハリを出すために必要な急テーパーなマンドレルが、もはやどこにも存在しなかったのである。ハイカーボンが主流の現在、ブランド工場にある最も急テーパーなマンドレルを



写真上：アンサドフィニッシュのブランクに、ペンで書き入れられた文字が、本ブランドのトレードマーク。写真下：約40年前のマンドレルが最新のグラスロッドに役立った。まさに古きを温め新しきを知り、ファーストモデルは完成した。



使つても、彼が思うシャープさにはほど遠く、俗に言う「ヘタリ竿」になってしまう。専門のマンドレルを新たに作ることもできず、開発は難航した。

「問題を解決したのは、僕がウエダを辞める時に譲り受けた40年ぐらい前のグラスロッドのマンドレルでした。スーパーバルサーシリーズの「FWS55LC」のもので、これが新ロッドにピッタリ。で、すぐに試したところ、出来たんです。適度にハリがあつてシャープなグラスロッドのブランクが……。それにしても僕が小学生の頃に使っていたロッドのマンドレルに助けられたんだから、昔の技術は本当に素晴らしかったんだと思います」

こうして、モリスグラファイトワークス初となるネイティブトラウトロッドである「TRD1501FS」(ジェットストリームヤマメ、以下「501」)の基本ブランクが完成した。

ロッドと釣り師の化学反応

ここからの展開はとても迅速だった。先の『501』の他、4ピースのバックロッドを含む4機種の新ロッドを発表。特筆すべきは、本流用のロングロッドも開発したことで、これには極薄のカーボンシートをコンボジットすることで、レングスが長くなることで派生するレスポンスの鈍さを解

消している。いわゆる「ハイブリッドブランクス」というもので、安達さんはこれを「プログレッシブアクション」と呼んでいる。

「使用したのは40トンの極薄カーボンシートです。ウエダ時代にも異なるトン数のカーボンシートを重ね合わせるマルチプライ製法を確立していたので、技術的にはそんなに難しいことではありませんでした。なんだかこの作業をしていて、カーボンロッド

に初めてボロンをコンボジットした時のことを思い出しましたね」

そして迎えた2019年は、サクラマスやサツキマス用のビッグトラウトシリーズ、『77FSX』『84FSX』『77FCX』を発表した後、UFMウエダ時代の名竿である『BWS(チューンドバックウォーター)』を復活させ、アブのオールドアンバサダーとの組み合わせで、大きな反響を呼んだ。さらに、直近ではこのシリーズをより一層進化させた仕舞寸法20cmという究極のバックロッド



目下開発中の高比重プレミアムPEライン。環境に配慮してバーケッ印印刷もなく、安達さんの描き文字のみの予定。

『BWS 50FCMRX』他2本を発表した。

「ロッドメーカーとして多くのファンに愛されたUFMの文脈を残しつつ、今のフィールドに合った新しいロッドを作る……、それが私の最大の課題だったわけですが、それが最大の課題グラに認められて、本当に良かったと思います。今後も、手に持ち、釣りをすることでロッドとアングラが化学反応を起こすようなロッドを作り続けていきたいと思っています」

(まとめ◎山中光博)

Morris Graphite Works TRD-911FS-HRX

海サクラや海アメとも対峙できるグラスブランクを開発・採用した、3ピースMH/Vワウのグラスロッド。新開発のブランクは、最内周に46トンの高弾性カーボンをワンプライ配し、その外周を超低レジンガラス素材で多重プライした「TRD/ハイブリッドガラス製法」によるもの。

Length:9'11"
Line(PE):0.6 ~ 2号
Lure:5 ~ 48g



Back Water Special 50FC-MRX

チューブラーブランクス / フルガラスのテレスコピックロッド。各セクションの重なり合う部分が竹の節の如き役割を担い、人馬(竿)一体感とBWS伝統の極上のアクションを醸し出す。ややファースト寄りのアクションでピンポイントを射抜き、バックハンドやアンダーハンドキャストも決まる軽快なキャストビリティが特徴。11本継、仕舞寸法20cm。

Length:5'0"
Line(フロロ/PE):2-4lb/0.3-0.6号<x8>
Lure:0.9-4g



Back Water Special 501FC-MRXTi

源流及び渓流域を幅広くカバー。"ジェットストリームヤマメ"を冠するグラスブランクス&チタンティップを採用し、ロープロファイル切削シート、カーボンチューブラーを随所に配したグリップ構造が特徴。ヤマメ特有のショートバイトや尺上の突っ込みにも柔軟に対応し、確実に締め獲る。12本継、仕舞寸法20cm。

Length:5'1"
Line(フロロ/PE):2-4lb/0.3-0.6号<x8>
Lure:0.7-3.8g



Back Water Special 501FS-MRXTi

UFM時代の溪流スピニングフィネスモデルが、テレスコピックのフルグラスブランクス&チタンティップで蘇る。アユ竿構造理論をミニマム化した最先端スベックにより、さらに軽快なキャストビリティ&操作感をごセールスポイント。12本継、仕舞寸法20cm。

Length:5'1"
Line(ナイロン/PE):2-4lb/0.3-0.6号<x8>
Lure:0.4-3.4g